竹林抄之註

春〳〵恋

伊地知文庫
文庫20
88

文庫20
88

伊地知氏書冊

竹林抄之注

宗祇作

夫連歌と云事は哥は五七五七七
の五句を分て上下の句よろ勢ろ物や
昔の人は云へ家哥とそいひ〻ろ是は
哥の篇序題曲流やも詩ものの詩も
分てそれ〻〻云へ〻〻歌を聯句といひ
哥をそれ〻〻云へ〻〻是亦

宗祇自筆

たこれこそあり
屋戸にさしけのうちく
景行天皇は沖ゐを屋まちにけと
ト日本武や
たくさけはかりの為ふをしまりて
芳東國よりひきおろす時屋まとけ
のみかと退治のためふたもむき治て

たくさを山よ法陣あり刀と久くさ
て出るひきを出めての引治時甲斐國
さらはりは宮よりも治みを純沖句よ
ふひらたくさ球迫ていく祭祝し
と屋ろを
火をともすりいのつ年てゆく
かゝるへは秋ふくの秋日よ八十日

をとゝ付て是
是連歌の初なれいたくとれ利なし
まるもの
花山の法皇は詠きる歌ゝ
花山の法皇は法自撰拾遺集をは
こゝをひらくとか書るは古集に
遊ゝ有まゝ入給ふ故や

基俊こ歌も詠こ遊ゝをもつて
とせりある時大條こ位入道基俊
の弟子にちうんとて車をとれやふか
さゝせて八月十五夜ゆゝれ給ふ
より基俊あこの色出て
中の秋十日五日は月をえてとたる
ふ詠せられ多ふ後成卿元あ

付られる
夫の寝みてきみとあくさんと申され
る詞外感せられきを外立家之
家隆ゟおれまを寄注よいと面あら原
芦原の世ニ法ゝ分てあ原ハ
日本のことおれらもさいそい代ゝの花
詞よいへり

柳の糸よりくふ昔も芦原のたくひ
ふるきり勅撰の一乃集よあゝおされ
いるさと生詠ゟ里をむらしハ
ゝ一首白又白三白いひ捨ゝ八全
ゝそ白百白ゝと云ふハゝ里を
屏家ゟより懐紙ふ古ゝ引ハ勅撰
の連歌の集おゝてあゝあたゝ形

りしや

おにつの物語二條の大閤の清達

物語ハ大臣也

菟玖波集二條取扱清閑所ゟ

位て云て角ゟ出今の集也

物語や筆おとゝてるをおゝ家と

勅定と云たゝら儀也

是ゟ倫言卿子の御初也

勅撰の和歌よかゝをゝ（は菟玖波

集古今後撰おゝ）ゝ歌ゝ物ゝと云也

をゝ引れゝ物語ハ是ハ中納言

一條禅閤我ゝ古事や

新玉集はくゝを集ゝ後ゝ云ゝ

角ゝ迄ゝ今ハ集や

編命を皇の勅定をハ編与編云
編命あるゝゆゑ
桃の花の一條取出而の文庫也
恵仁の大あるを下の兵乱とあれる時
節の儀や
志ゝのすゝゝ古文ふ志ゝすめるや
あかるを反古と久ゝとをもゝちゝし

ゝゝ祢や
爰ふゝふ祇と有ハ尾まゝふけの
芋よりも南りて今の世までの連歌
たゝ行く数不の次〳〵をこ南りに名る
通序也是より志をい又竹林の
別序也
法家のうちきゝ是ハ和哥ハ家也

欽の歌乃内とうむる

竹林抄巻第一

春述欽

ゆゆし年は多南とゆ家
尾上より表し山や春むらん宗砌
はつ句の心古ゆし年の言葉といへハ方
ぬる年は尾上より春初て表は
ちら新南西言葉の尾上の雪と云

あらハせハ芳句の言葉ハ言とあるを
取て尾上と付ふるゆ立春ハ春を
言き山よりあらハ春を和ゆにも
讀あらハきらあや言葉ハ大和國
志き嶋と云ふよあり推古を望ハ
文あらうと云ふ
萩ゆ花ゆ袖こうけて高砂ハ尾上ハ高ひし
少名雅

志き嶋や言葉山ハ春を言ふ光さ言ふ
ふるよあるゆ句の袖さ言ハ月
集の巻なとせうゆ代この集ハ言の巻
なと合て姿ハ不名面
志ハこま(の志ゆ紀ゆ)
ます鏡之ゆ紀ゆのためまて賢盛
ゆ之志のこゆ(といへゆみま(の鏡と

佐渡の沙のためと云事ハ初嘉の
沙を内裏へ奉りて生厚造ふ
よりて国中の豊年をたのゝ沙の
横伐頃奇よ
宝永元年に成るに今年迄の沙池の水のふ
うちう物もてゝ衣も乾し　ふゝき恵を
志ばめのあいだ山のうす霞　砂

衣と云ふ霞をいいふらす人も思よ
ふとも也志うれとも山ばきいるにあせらう
らゝ面々もゝてゝぬとあれハ志ばめのうす
霞といへる人ときあてゝ誠ハ時也
月ゆゑ里にゝ名そさうたゝ
ゝ望こうう面し指の吹てゝすむと数
古江の望と成指ハ独いるとも知ぬ

ゑのこ餅古今にも是をうたへる歌

さゝらをとこ舟をくもれし

釣から家居ふる海人小舟　敬

よそめハ誠ふのうらなれいとあこれ

人ハさとかしむよりゆ

ふもとなるむろのふるき木ゝを

船よふともゝ浦との夕霧　砌

あのむろハ仙人修行の人のすむ所

かとゝゝ木本原こもる面也付る所を

はようゝ夕の舟ハともゝ浦ハのむろ

の木ゝあくりの霧よこもりと付也

いろゝともゝ浦ハ備後國やむろの

木をよめる所也

ひきてこゝともゝ浦とのむろの木ゝ者

ふるあれとそらん人もなしとあるし

木の下ら茂くたゝし咲むら

松さてらすゑや磯のゝ糸の海　賢

付ら人ハゝ糸の浦の松の木ゝ下ゝし

のさ筆ゐ祢之

治承ら新ゝ糸の浦を此ゝ紀と

とよまるゝ紀へし

波風も江の南こそのとゝ多ゐ

おゝたゝらすむ紀泊のら城山　敬

江の南と云を雑波ゝ元ゐ世ゐ雑波

より紀の國ハ南ゐれゐ毛宗ら祢

をゝもむと付ゝれゐり唐ゐ江南

十ヶ國ゐ暖國也

山ら筆ゐ球くも毛ゐ多ゐ

里人の汀ふかくふかく河 水

里人のあゝ美れ山陰ふかく出る心せ

山陰と云より河川取られ

古歌に見る葛これ河川渡る時そ明る山陰

夜笠をおつむるよ雨せり

木ぬれも見よ出るむかつ雲

菅乃蔭のうゝれをそ釣つゝて 砂

人人梅ゝこれ色に出る時分木の目も

色よ出るとあれは木のめを菅ぬ人

ふる籠の目ふかせうふうこれ

ふと成つゝ入いるはかこのめも色ふむの迫

君乃うゝのたう色の山

吉ゝ行歌詠の志ぬ原富清て賢

言葉の歌ちぬ志の原とよめる所也付る

所ハ隠しる心なし

言葉ハ生ちハ走の糸末さハ紀そゝ木枯

宵ふ吹ぬ也

その数〳〵の走りて紀う〳〵人

玉敷のあらしを思ハ吹ハて〳〵須

美の言をうたふ言ふ付ぬせう叢

走とハ大内ふ正月ある笠舎や十四

日の秋ハうゝくしき男枚をそろへ今

の言をうたをせ沛越て万呆を

よをふや十六日ハ秋ハ女蹋言や女ハ

〳〵ちよきをそろへうゝ思せらる

也頃ふ綿をかさすや吹ハて生言

の走ハ〳〵を判し洛や言ふ

ハちハ増さへすあらをろ式かさハ北綿の

白き月秋は

はるかすみ　うつくしう白し

きぬいの帯ハ又もむすびし

石川乃あき紀ぬハ　ゆ解て　賢

石川ハ淺々れハ　はぬ清てハ又もむすび

と云んや流水如帯と云本文もあ

にや　花田の帯と云に石川歟

付ハ俗言ハの哥は

石川乃こまゝ糸帯をとゝれてうゝき

ゝみすゝ伊ゑの帯ゝ花田の帯の

中ハ亀ゝゝり

石川の花田の帯は中ゝハ高の巳ゝの歌

花田の帯石川ゝ　おこゝ地但石川と天

川をもいゝり又かもゝの美名や　花田の

苔をよあるハこ南の渡の道や　七時

石川やせゝらぎ小河の清まれハ月こゝろしを弱て濯

是ハ賀茂義の明ら〳〵し

庵せゝる就をあゝれたてゝる

庵の〳〵ふ〳〵ゝを打ふる梅咲て　敬

付ふんハゝ〳〵れいゝ有明し梅ゝやせゝる

と云詞を考ゝせゝり又詰て

百練功成氷骨枯十分瘦尽雪

生涯ゝいつ

家さゝて星ハ室に入ぬ

海ゝ有小明ら山ゝ〳〵れひきて　忙

天上星皆拱北と云て星ハ悉小

めゝる物〳〵有ハ小れる山ゝつゝゝて

星ハ室ゝ小深くゝゝと付〳〵

又皇子衣をよすゝ筆ハ小牛星
芳振衣横と云ハ人
蔭を引くゝ井手の中うち
物ゝ衣山ゝ皇筆引きたゝ作
星も付心ハ昭人芳の蔭を分ゝを衣
のかゝるよゝ世ゝ山腰物彦鉢云章
筆といゝ白匂ハ星より花くまゝ又

井手ゝ筆と云すハ大和物語云
芳天武天皇のゝ時ゝ移ゝ日ゝ人
喜日祭の使ゝ立ゝ時ゝ見て云
所ゝいゝ紀ゝあき女をみて筆を
とゝ世ゝ行末を原契れ系氏男
をまてゝもこゝ引れハ情女男の心
のゝゝゝ絶根てむ水ゝ才を

投て死なり平きりは変する
すふ境ならハきり
山城の井手は玉水をむすひ松しのひもなき故成なり
とよあるかちは意之
そてハかれ地の露は多等
かも是は菊紫ふ赤ふ書面　仙
々書面ふうとしくも是　初ら花なも

つるよハ雲のの多結ふ（きと付れ伝
雲乃ふ雲ふ書きし乃金は伝ら朝ふ書面そふる
書籍かすこていう乃金ハ今そ吹なら秋雲の上ふ
ふくよあるこの面新るる面し
昔の色ふさむく雲そつ不生る
岩角の紀岩は桜ひもるの移て此
まく岩の雲も沙る時銘ふ巌ふとも

前ゝまふるよりて

光そくたるひれ上のさゝ[illegible]の前もろ者に成ふ　[illegible]

はき者ハ誰ゝ[illegible]きんゝ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]ふ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]

巌ハ初春よりゝ下前ゝ[illegible]

年ゝの春ハいつふゝ[illegible]

[illegible]の葛乃ゝ[illegible]むもれ木　作

付ゝふハ葛ハゝふゝ物ゝ埋木ゝ

春ハいつふゝ[illegible]ゝ古今序に

埋木の人ゝまきぬと云すあれゝも

[illegible]の人ゝを葛[illegible]ふ[illegible]付ふり

いつゝ清ゝむ[illegible]の[illegible]ゝ

あゝ小田に[illegible]ゝ[illegible]の前ゝ[illegible]ゝ敬

[illegible]ハいゝ[illegible]ハ前住てゝ初春

の祈

荒小田は去年の古株の事なるべし去

へと長くなりぬ

といつる今よりかく思ひよるべ

江のくまも去や志賀らん

すゑすゑ田花の跡は面の景　賢

田歌の跡は雁渡るあり田鶴とよあるべ

雁渡る塩みちくれいあり衣田歌の跡はら

雪はなほ

去ハ去るふ狩はられる

老ぬれいいけるる月も朧なく行物

付る心ハあるいや分る

八十路とれハ昔は去よりも狂朧なる秋の月の

むらは過ふ梅そまかへる

かすむ秋の月はもとよハ人も見ー　敬

梅うは昔ハ昔むしハ昔て人去なきあるる去の

秋の月

ふとゝあるゝ人に又枝葉平釣臣西の
ゝひゝて梅花さうにこそを立て
いきてゝちてゝ之をてゝうきとこそよ
何ゝゝくもあらたうちふきてあハらはる
いゝきふ月のうゝふゝまてふせう
て去年を思ふ出てゝまり
月やはるゝ去年昔の春ゝゝ我身ひとつハ
もとの身にして

ふゝゝいつゝ西行をあるゝ
人ゝゝてゝゝ弱稚ゆゝゝゝゝ
咲花枝木はもゝすゝこれをゝめゝて 助
花をゝゝゝ去枝木のもゝすゝこれ初めて
世枝捨ゝ人ゝ習ゝゝゝゝ
去世山尾ゝて出ゝと思ふ歌花数ふ人ゝ待ゝ
西行本意也

南くのさら窓夢もいふさた

羅花四林と人をとゝむらん　作

山林ハ寺の詞と云ふ付る詞の林

といへるや方ハ点云わ法又ハ自己のム

法の日明月を花世一語能留客

と云ムより云ふ作

うへさい重ふ花の月明

ちらさ里し花をハ空に残きて　作

くる時ハ花ムさし保て空もまよ

ふ花ふ月の詞さハ花の重ふ花を

月ふふと云ふ山ハ恵慶法師聖の

山深ふ春ふ残るを残ふ春すして詞ら

よそよめる心成つし

苔ハ居さしてきつれと岩ま月詞之山の花の　寄々き

稀の契りハさらに七夕
天河交世の花ふは幸して　敬
生有も天川と云有あれハ君ゝま幸の
稀ハ有ハ年七夕ハ年の引ハりゝと
天河ハ切内世
日もあゝ星ふ又やくゝきむ
あゝ山や花の古ゝ住さて　敬

七星の京ハあゝハ敬ゝ移し初あれハ
深く付ゝあゝや
庭そ茅木の中ふ荒ぬる
山科や花の古宮春もうし　砂
山科の古宮とハ延喜の山陵の西石山
陵ハ市廟や庭といゝるハ山科のせん〳〵
の宮住給て殿おゝ〳〵ゝ勢

作られしを伊勢物語にもとる道
菊木と云ふ山科と取よりて
数おくて世間人ふ八山科の宮の菊木と
あらまし物を
見のかぎりくふる旅人
山さくら陰ふ袴を立分て　作
付人八明や来買人とと云人也あを
出る時肥馬宮車にのりすハこ女

此橋を宮ふ〜ゆと書付出るの也
おふ〜今牧蒔の太字と成て袴を
きて古今より云ふ〜ゆり詠
さいむるおもふ人ふてよき
山ふ八花を折ふ告もせて　敬
花さく八告人と云て告るを保恨つ
ゆを心ぬ元ひる道〜〜山ふ

人のおき智おれいひ年はあはさる
もさのことをなら浜と思ひ子心や
海をい我さるの無城寺さい
志をもきぬ花乃山ノ　作
山ノの海ふ花いい川ふ吾そと
と八と寺捨て志をもせぬと云心や
西行山家集よ

山賤ふ花咲ぬと見ぬ人をいき志ら雲と
ふくとよるる人形ら
地ちぬ色城人ふ
夕雨等丈の稀ら花ふきて　作
子の色と云を花ふそとふる之ふ
書の程い花城ら人数ふそしら
夕等よハ皆海ぬら祢よ独居て

さて春ぬるて咲しゝ花ゝ花ゝさし
乃色ハ変りし〻昔ゆゑきけゝそ花
の新ハまきれゝと云系之
地さりれ末よ身のむ有ふゝち
又やゝむ老曽ハ春の去ハ花助
付る心ハ色江國老ゝの森の花伐
ゝて又ゝ後ゝ春ゝと契ゝ名一句

のゝハ老ゝとハ我分老ゝ
又やゝゝゝ
又やゝむ又やゝゝゝん切末にたのむ老ゝの春の数、
又やゝむ交世のゝ揺ゝ花の雪ちゝ春の時分の
いゝ〻の古世の言葉をきてゝく
老木の花ゝ山ゝ勢ゝそゝ　宗
ゝハ明や方白のゝ春ゝ花き言ゝ

如是いの迷ふ人あるべうなる

たまゝ引さる窓の山風

春の秋や夢語も花ふ匂ふ　砂石

付る心も花の打絃窓よ吹入風を枕

をうれ八夢路も匂ふ

数ふ木本ゆゝ梅に活ふ春れ　よの美

おゝの祇や

人伐まゝよ八活ゝき秋る書

茶を風ふ物ゝとゝ坐へ屋

我も秋書人を待ふ数れ八

風八花を思ふ物ゝ秋ふれ屋々

ちらすし生先待人とゝ

たゝふゝ行す八待さん山橋ふ新ふ白へ

いつまゝゝ白伐屋も山橋風ゝ先ふ人のゝ

おもくよるうたゝ
もらしさうりを人ゝ見て
見そむ花を一ゝ数ふれば
付心八大光世尊の威のきハ小一ふき
の花をあけて大会ふ見て拾時迦
鉢をいふく布ふ迦葉一人破顔微
笑し給ひ時佛乃こ拾ひ我有正

法眼蔵涅槃妙心実相無相微妙
法門付属摩訶迦葉こ仍て乃
仏法八迦葉尊者ゝ伝ふる所也昔八
一ふさの花ふくさとりをそ見れ共
今我のおる花一本さハ色ふそえて
折ふり毋と御ゝ思人ゝ
袖の香をゝ新春の山風

ちぢに物思ふ人は我身にも恨むる筋

花ぞ恋しき人神無月

人を思ふ心の色の深きにて

白妙の袖やさすらんと思へ

ぬるとしれぬ夕の空の雲

花は風にしをれ咲くらん賢

人花は風のみぬ所もなし

風ふとしれぬ袖の奥山もこの花と

袖ふれぬ

いつくにて風は世をもいとはじ過去世の奥も花散る

とよあらしかな

むすび床をあらひ記

菖蒲は山下ぬれ花ちる身

人は下かせ花散ぬれば

重

ぬんりはきやちくら住きと云利ふ住き
菖蒲と取あせうとそなてる屋役優
渡女塞時一云主神岩橋を渡給
うちくる、球住くよけさまるる屋
いひちらきるる屋
岩橋のよるは契も絶ぬ（明ら住きちら　きの神）
あるにふまるへは来久るん

さ記地ら花のこむらの山　紙行
けるんは明やはあるにもあるのん
ふ丸あきり今ふ
くれと名あふ立く河しらは二村山は去年すそをけら
芝生ふぬくり家ろる山
橋ちらよ唯は立の春さひて　作
けるんはあきらやや

芝そゝろ雨は芝草踏分て去世の云の時不の

人のこゝろのあはれ世中

花は誰うらふ物とうらむらん砌

芝をあはれある物とハ思ふ恨むへき人

のこゝろ狂はあはれある物をとゝ毋貝之ゑ

ある女の橘のおもゝ散物ハ形と

云か筆ふ京ふ毋貝之

橘花とく散ぬとも地不寸の心ハ風も吹ぬ

おもゝよあるゝ心や

いふいひてこの後ハうこゝ角ん

とゝねをもうしれハ之行花地て帰

我身山里おふ住て花の盛に

ハ人をとひおむと思ひ筆ふ日は花

をうるゝとうるぬ人とも云て

ふる花のある時をゝ人我思ひ
出らハこそをへられ花ちりて
後いかゝかうらんと我心のをこ
る様いつらんも
いたのゝ雪ふまきはゝ
散ちる花ちるを誘ふ嵐ゆゑ
ふハ雪の降るき時ふハいつのゝう

まき散(きとある様ハ花の
ちる事のゝ形なんをいたもを
ものなるも
爰うたくともうるぬ明不の
月ふちる花無こゝの世の物なりて敬
波月ハ雲ハ曇ふ花の散軍色云語
道所明るハ時ハ墨の物ハあらぬ

八夏ともうたくとも分ぬんや

已新らしく世の物と思ぬ唐なでしこの花

世すもこれ世の物と思ぬ武蔵の寄るつる月新

世にも忘ぬ表れ而新よ朧月秋の花の光

あらくあらんや

すむ山ぬうし誰ふたらまん

花ちらハあるまてまれ賢

なの住山をあのまむふ取あせう花

のなに比添きて白く奥山のそれも

水も人ふまらまんとも

吹風と谷忘れとあるうきハ山くれの花ぬ見まや

むまれぬ先ぬ誰の光ぬ

南いきより寄せ巣山ぬ目ふうけて帰

子の生れぬを寄の菓子ぬ生ぬ

先ふと行

もろこし山菓子より目をけてまもりゑ
せる屋子を窮

ふとくよりある心や

白はむ心そ行くむまを

箸窮はす山の小雪又うけて　能

奇の行くく生るとハ往生のあを

小雪は行くく生るを元あせうく窮

小雪をハとうな物あれハ窮は菓

のあるりを形くく小雪もすむ久ゑ

うはをは行雪をうちの奇の居

すゑ世の水小蛙あくうゑ　賢

奇と云小蛙を付うり行雪と

云小末の水と付り取より行雪

神と云奇の姿あれハ之雪のう

佐竹行水ふ陸の唱ハ金神行事
神の云わと付ふり
春秋ハ人生ハ日数時分
等ぬへき弥生の七年くらて助
奇ハ基の書ふるをいて七付
人ハ弥生のくらて里て又あへ事
をうへきわ

ふさしとふれむ 袖のうら風を
たうこれふ萩れを 陰まきて 紙
はあふ秋萩あみ ふ元なてたそ
られを付ふるハ萩ハ望そうきふ
面白き物あれるわ 源氏ふも
我屋ふ萩の色ふきたそ 孫屋ハ萩
いそねふふ秋 ふ別 詠

春の浪又山吹の花咲て　蓮

いとゞなを紅山吹まて付すとゝふ

春の浪と付る別詠をも春ちふ

元ゐせり山吹ハ口ゐ色ゐれを物

いとゞなをとゝまるいせり

九重に行て花咲山吹のいとゞなを紅ハ

山吹の花色衣ぬゝも袖とゝまるいへ口

ゐふて

菊ふゝ紅くむゝふ春の日

萩さ寄ゐ小の家〳〵末ゝけて　賢

付人ハ萩さ寄ゐ小の家とハ萩原

家や菊ふむゝふとハ春日を蘇原

乃京廚の神ゐれハ仰ん也

春日山麓の菊ゝ思ふ小の萩ゐを素あとハ

ふゝとゝまるゝ

志かむらをおもくて人
面そこく長代浦江のうらさびて 蓋
芳ハ至上の立裏ふ花ゐら志かむ
を歎ゐそれを浦のゐらま形して
至人らと海士ふこれなせり 浦江ハ
津國や鯉鯛法るをよゐ奇せ
路ゐる浦江の浦の奥津すふ釈舟いそふ 月のさゆき

蔓連歌

むらさきの庭ふかきこゝろ三川名
ふぢのはなさく咲ハこゝろ里　砂
紫の庭とハ大内のことゝ又三川水と
云も大内よりそれを紫をハ杜若
付ん藤水をハ三川の國小太成て
八橋と付られしり　武句里と云字

れくハ苔の庭付うきや伊勢物語
八橋の沢ふ杜若さ事ゝよ
見ゝそれもかくよりかく
名残の玉ゝ書ハ行らむ
蔓ハ松ちゝ出よ不ときに　賢
人ハ書ハ蔓の一字ハ名残時句
ふ残しゝゝ詠ゝ人ゝ秋の一字

を續ふきハ當の子時分あれを
ふく思ひよりて
當れ卯の中の中れ時分ちかう父は仰て
當の家こゝろ時分あるもこれ等の名れ
うれしかりをり賜の筆紀
不ちきたま彩山小木々れ多賢
賜と時分ふ物語あり賜ともすの筆

くきと云にも色とれ花色白ハ
時分のためふ賜色とれ出ふと成
筆木の枝ふ市て色く時分を
行と云保也其筆草も木かくれて
見ゆと付多
卯月の山ふ鳴る山吹
口那しれ色ふ為あらあれ郭公　助

山吹ハ口脇ニ生れハ物いうなりと云
なるハせハ卯月まで咲る山吹ハ
時分なるひてなくて迯ると云ふ
きゝそたやすふる神のうれしく
時分不のうるひし山ゝ祝く敬
人ハ昔武子内記王賀茂の神院ゝ
うれいう給てそけうと山の時分成ゆ

給ひしるを屋ゝそ切りみをも給て
次の年去年を思ひ出てよゝと給ふ
時分うれうと山の猿枕不けうらひし
心ゝあそひうるや神山ともそのうゝ山とも
賀茂山の事や方句のそけうとハ
昔のるある成山ゝ云事を云てそ
のうゝ山ハ元なるせう昔内記王

木のうらびしとときさる浴ひ山ふ
七福てきけハ昔ハ静をきゝて
たゝふるとはゝきゝを
栄くも色つゝしこれ文古色
郭公寒ハ青羽の山さて　敬
起色ハ角田河雑波塙ハあふ
よあゝ略の大きしてゝとあと

あゝき色ゝそしふ付ゝ人ゝ寒さ
時色青羽山をさ更て起色
とふれゝ夢の色ゝきと付色
青羽山ゝ起越くれハ時色相ゝ
ゝそ略ゝ
青外青羽山ふ切くゝあゝ
そさゝあふゝ乃夕暮の寒
郭公あれ山ふのひふ略ゝ　敬

人ハ時々思ひよる一辯なと吟ぜて
ゐることもあるなり夕暮の雲の形
を付らるるなり時々を雑俳とよめる
津ゝ國の難波の浦ゝ郭公あれふく滝行返しるれ
ばうく匂の人ハ皆雑俳匂わるて
大事あるゝ祈や知ぬ人を雑俳也
云ふ芦とよせらるる思ひ見ハ
ふ

ふの歌ふ吟ずるといふむとも芦
ゝ思ひと云ふ家ふ名聖と人を中ふ
をく枯初や三句四句まていひつ
く新をハ序の奇といひ文字
ゐ云をハ枕詞と云中ゐをくをハ
ゐ皆と云や云の ふ
聖ゝ称ハ分ゝ我ゝ聖ゝ賢ハ
ゐてすゐを名

敬

塩竈は大和にあらぬ唐衣ふるを脱すて　逢坂越

たゝゝうき多付ものを唐衣龍田の山にあらし　くれく

宗外は神の方今涼ふいとあらた

あらたなきいしし入あひの鐘

郭公ゆく水之忘ぬ日ハ昔て　敬

是ハ曉の鐘の時分時雨降分名

宗行水鉄之に入会の時分時分

鐘の音ハ佐る杉能時雨を守し

物鉄又ふ雪ふしと思おるんや

あらゝいくをひ雪とふるん

郭公森の宗に鞍ちらす　敬

付るん時や

逢ふ雪ふ之の時森の時雪ふる宗に　雪を消て

あゝよあるんなるし

その名は、ある夢ハ大内

山なゐおれてきくらん郭公　助

昔こそ智こそ皇木丸義そ名のり
せ給しそを瀧口そ名のりむる
くいつり付ん時名れ名のさら
を大内山の山ハ別くゆらんと付
らり時名ハ我名をおのきハ野
大内名変の武士我山名と讀名ら

ハせり頼政いまハ内裡名上我名
されぬふと我歌て
人生れぬ大内山れ山ハ木くれての月をみる紙
あさくらの木丸名ふ我をれハ名のりをしく行たらそ
神代やあるしおるの葵ふの花
祭ふる葵山さくら折くさし　作
賀茂乃祭ふにを昔ハ橘をかさし名

七八葵をうさいする

神代よりこのかた志賀の橋花のうさしよりれるたのハ

おとこよりあらんかぎりなく

うつりてうらうらとしもあらし

志賀の志ぜ物ふ物やうちうん賢

君ふたうらうらて私の宿ぜんて

見もせぬ内ふ物も打ぬうんも

古今七ふ

よろこぶうらうらとしたふ

うらうらの思ふ事ぜんうら板戸あうて

ぜんうら志賀の志ぜ物ふ

と云ん物うて

次うらうらハ形ふうやうう

春ハうらうすうらの落志賀物ふ敬

をくらとハ焼地城云事ハ有る
ハ世ふ火のくらすもをしら草
きたりて生を落葉てゝ雲の花
をうれい春の火れんちまるゝ
栗津理のすゝの落ちのくめハ冬至
月ハ波をしつれ松の一こゑ
とも さたよるれ山路の郭云 助

照村ハ夜の庵るゝその火や
付る心ハともれ庵海松ゝ時雨
の一こゑれくゝ付里
むをふせくゝゝて吉野の嶺
淺ちふを庵のゝ月ゝるを付山砌
小堤山ふ寄形しの瀧あ里庵ゝむ
をを付や淺茅生を庵の胸ゝ有る

と付おせり　麻の子あまは音れし

と付られし里

朝夕ふ嶋音絶ふるふ嶋山ハ蔭風音なし

氏付根ハ菅笠雨やうるるるる

淺香乃山ハあさ紀哥のは

小田うゑる玉ゝ江ふ切立て賢

方の哥ハあさ久山陰さへ見る山の

井のとまるいとも付るふハ玉ゝ江

江も淺香山もみちのくふれハ海

ゝ江の姫ふ切立ふる田鶴

ふれおせり

浪ふ絶ふれあめひく袖

末ふ絶くゝふるさ月ゝ玉の緒ふ賢

さ月の玉と云るハ五月雨ふ葉玉

と云物をたらぬまてかうる事歟

小意歟と云はさらに

ふハ又あめ(雨)ふ(降)ねさへ(さえ)てふる(降る)袖の玉

う(宇)野(野)山田の中月面の比

一むらはさうひの櫻花咲て　賢

是ハ比と云字能付る事櫻ハ六月面れ

時節の景也

櫻咲外面の木陰家蔭くゝ六月面さ(さ)ゆる(ゆる)事

住吉と望(望)はうはれ名のこと

ちゝ井の濱のうらうら秋の月　作

石の名ハ七井といへとも月ハ短歌

おれハ名のくゝる事七井の濱ハ住吉

ふ(ふ)あれハ也

住吉とあるハ告とも(告とも)あ(あ)る事すみ(すみ)よし(よし)

蛍籠にて思ふ芝の露うせ
橋のうらに袖ふる雨蔭哉　作
蓮ハ芝に衣ふ用物おれハ橋よよ
そ〳〵いて
蝉のなくあきんと我もしき
行史ふ蛍にもてあすん　同
ひらてハ蝉のはりこ〳〵鳴くらし　秋ハ蛍の
もゑて流れ

あるこゝろ形なし
林の地に蓮うきこゑ形
蛍蝉のあ形新家ふ鳴おて　賢
蝉ゆくこゝと云ハ磬と云々を
こゝよ洲ふこゝと云智ハせう但
蝉といむ形な蝉と云伝も
云ふ事

不形よりも紀ハ世語もれらた
引出てる麻の中にちらた蔓のはに附
付んハ明世麻中の蓬とりんるる
世間の麻ハ祝明成なるんの人のよもきのこと
年をへハ山さへ高く成ぬ
事なるんるる富士のるつ重賢
重ねるる紀ぬるるとも蔓ハ消へき

ふ未消ぬ上ふるる降雪新
ちくハ年ゝへハ山も狂言く
成屋ゝるる富士の初雪ハ六月や
富士ね移ふ降つむ雪ハ六月もちの日
はふのれんるるる降や
うす紀衣ゝ風そ世るる
蓬葉のるひるの打志めり賢

蔓の焼物ハ芭蕉の葉と云あれハ衣ハ
屋とも付ハ付ハ付ハ
潮のゝ音ハ日夜くれぬ
いく蔓伝清水の寺ハむさぶらん賢
此清水の寺とハ新清水の寺
家ハ昔田村丸の建立也観世音ハ梵
音海潮音にて世ハ有ゆゝ音

紫記き音の音辞也仍潮のゝ音
と云ハ付ハ
あきかぜ風ハ吹
むかし蔓のひらけ多源氏 砌
狩衣ハ此浦にて弟狩殺し時扇を
形見ハ立名所ハ扇より出
時ハ元出きりんそれハ有所

さ衣の古すあらい所も誰そも
涼うする人ふ風心さよと思ふ人成べし

冬ふかう花さ咲ぬるかてこ
清水せく岩ゐ井の菅さそ　宣

清水てきふる所ふり深く月もさ氣
うう寒て冬のかれ小ぬ冬ふ
さ寒り梅子ふ花ふ梅子

乃布四

いふふ姫の中川の宿
夕すゝ秋ふ八泉を枕そ　砂

源氏中将の清方たゝ人ふ面影ふ
たゝ〳〵富士ふむふ大ひえ
六月のみふふ行ふ　賢

ふふふ何ふかも行の名や又

富士にもありひえの山ハ富士ア
多くいる山やさしい美ハ
河ハ行ア大ひえをうれハ富士
ハ人ちすと云儀や　ゆるみうら
とハ社乃ふをみをも高
松日ア浅茅ふてら陰さひて
清秋いく世ア志賀のうらん　賢

賀茂の神院ゆりみせ給ひてハ
志賀ア清秋あるも浅茅清秋
のをみれハ取ア
ゆるも人の才能思ふらん
清をうれハ浅茅ア清秋川砂
六月晦日秋をしらく麻のを茅の
輪ア成ア　すらぬきして生財祭

をゝし捨て祈ふ雑笑をのべき

寿命七をや

六月はゝこしの祓するゝ人ハ千年の寿命をのべゝ

さゝゝゝゝあらぬ神もをしてふハ

小幅なすや　　この祓をきく

秋連歌

色ゝゝゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

目ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　砂

風ハ色ゝゝゝゝゝ桐風立ぬ音の松

と云心付出せり　　秋の心を松

吹風の色ゝゝゝゝゝゝ京砂代尾上の松ふ　秋ハ寿ゝゝ

行ゝゝゝゝゝ屋ゝゝ　　ゝまに秋ハ的て

萩うちきりのこる風の里　純

雁の行くえを萩はあれふへ

ゆき秋をうるおいくるを付おせり

萩と秋とゆきふ意は通ちかふへ深夜吟

人のきえの秋風ふ吹

龍田山木ゝは青葉を紫は雪分て　作

末青葉ふの雪をふる時分は立田山

紅葉ふしてをいるふんとんの末をお

ふよりや

大井川をちの梢の青葉ふんふる秋の色

水ぬむすへ八月もふん光り

三津皇ふ為ふ井を戸つる秋ふ賢

是巧賢とハもくいきとてふ八物ふ

秋ぬへふ星ぬふし祭ふ事也ふ

の華や

一夢を望のむ世ひの玉さらに

ぬるゝ行くゝ名残球まりん　助

雪の一夢を行の一夢ふるせり

蛍狩ハ思とよるゝ行ふ

付るふい行ふ

行蛍堂のゝ人まていゆくゝ桃風吹と

ふ告ゝを

埃の行の涙へふ夢

荻の葉ふ風ふちそゝく秋ハきて賢

はふハ涙への荻のふ風のそよし

秋ハきつゝ程ゝくゝハゝ行

の涙へを望つゝく付ゝきり

蘇夫ゝ人ゝ月もゝ菱のゝち

蝶のぬる花のとこゝ秋ゝけて　怪

芋のちりをハ床をそ付り

庭ゝふすゝ　ゝそ思ふ咲ゝ是妹と我ぬる　床萱の花

南ゝ海き地もゝ望そ思ふ

女郎花ゝ名ハゝりをゝ佐ゝ聖ふ　作

をゝるゝ　をいつれの高ふも女ふゝ

あゝハせゝされいハ只名ハゝりと思にも

たをゝ物ゝ女の面影立ゝ

秋の野ふ高ゝ咲ゝて女郎花あれとゝし　花も一とき

女郎花ゝ咲ゝ野ふ尾ゝ花せいあ明くあいの　名を名立ゝん

小萩ゝ咲ゝ　ゝをゝ明く山

落ちる尾上の宮ハ　敬

萩を当ゝ咲ゝ名ハ言葉の尾上の宮や　萩咲ゝも尾上の宮ゝ

鶉鳴く野ゝ庭そ感ぬる

荒ゆ年ハ物ゝ物ゝ宿なゝて　同

是も付句あり

の如の句や本の宿いとゝて

ゝしを句乃心ハ明也

浪ふ寄する宇治の山風

いゝ住おゝれゝる秋の居賢

氏浪をハ物花ゝて付星宇治と云

物ゝれゝゝ付ゝ心ハ星極ゝ星

近江元人竹音の付

秋の空ハ物花ゝ如紀尾ゝ宇治の数の

ゝ行ゝ星

ゝ詠ゝ

新ゝ不ハ咲ゝ色ハ戸を明て 作

櫂ゝゝ云ゝ光源氏ゝ

出ゝる美や付ゝ人ハきぬ〳〵の袖

元ゝ〳〵ゝゝ

篠目の花の釣合ふるひて　恠

いつれも花ふひもとくと云ふ、あれは

狂樓ふきくいひちらハせるふ

我ふるてを紅と見れ樓の多く事ふぬ　花ふハ色ル

いく秋か色し桃をそ人

嘲る客ハそ〻釣ふ咲のふ　砌

樓の祇院ハ桃園の武尼の娘や

父の為まうまて坂もそのをうて

住給ふ義やいく秋と寄ふあきふ

冨物りと付ふり王孫の人なれて

古家といて

家ふ老ましい志ふぬ事の月

花ふさ事　杜の陰ふる秋の事能

我為に杜の下蔭をよそへて付王

我袖のしらひとなきハ杜のなれる
おとくよる義也　寄の下葉

老のあるれを月もとうし
風つき松原の山の橋の唐　等イ　賢
深洞聴風老拾悲かなしみ
松原も老を付習や　古宮の神
を作話也洞ハ仙洞也

春さり橋伐むとぬる人
子日勢し哉への松むし又おれ身敬
おふし哉の嵐も雪も分かれぬ子日
の小松雲むしのうた
たく火志めしを月そ更行
きりくを橋の神　乎　を　う　乎　秋　賢
乎のいく火を神乎の社火ゆ礼し

世う苦うふとい神示のうふい
もれ、名や
狂いはまてを祝もるん
さかしつれ妻とふ苦の月ぞそ砂
さを麻の毒ふ屋方(器へ)ある日田八(ハ)
かとよあるんまて知て　変ハ変とも
をしるこすふ志ふ面祝

さ祝しつれ祝を祭唯のあさる敬
はるふい麻祝却ふ捧弓をしると
て宝伝然ふこすともるあ
くるをしるなくいをやこす
の大唯と云あれいよく出合ふる物
や大和や
契祝秋ふかよい宝身ぬら

あり勢ひたる美味のふ麻呂に写て賢
麻の美あるせと云るハ芦津國
佐室味と云ハ式人根をし
室ふ淡海（かよふ麻こ女を拾
と行ふ拾ひあるりにおよひの
美ふせ孔ふ室の姫りあるりて
見ふるると云々れる女麻けあるて

云汝淡海（ゆゑん時狩人ふあひ
皮をうれて塩付らんれんふあると
るそと云をき室ハこの麻やさ
て尾々猪人ふあひてこあうら
ひられるる
秋伐ず祈覚ふ学と衣や美
室乃麻も系ふ唱ふん

をの月に雲ふる夏や覚ぬらん
不そ雪ふ廉の明るうる
祝そそ夏多ちりぬく心
志砂より雪ふ花衣数きて　砂
百門寄よ志砂ふ衣の埋身を
恋しなるにあこむる内ふを衣ハ
立さり雪ふ消るそ祝の志砂ふ

多多比埋り身ふるをそハ恋す題
祝そそ夏ねをハ衣のるこ元る
日よりの夕雪そ小のうる明る　芳
いく山城久ら遊の通けらん　賢
遊知社日辞巣去ら立て法をめ
ハよき日功も末も玄も成己のは
出ふも玉ふ祝雪の世中

秋の田乃元ゝ和おもふうち侍ゝ賢
ひゝ和の内うなの地を出ゝと云成や
元ゝ和と八孫ゆゝて板木を
付て引あゝ事や
追手に事ゝ家や法舟山風
峯の月をそ紀八詩う元ゝ純
付ゝ八月の法舟と云すあり沸

舟山と云八六世ふあり月乃
ゆ舟代生き八ゝ和ゝひゝふゝ追
手ふ始家ゝ家ゝ方の法舟と云を
月ふ表おせゝり
是引乃山のあゝ代里人の情ゝ月のおそく出ゝ事
をそく出ゝ月もあゝ武是引の山のあゝ代ゝ情つゝ
交世のゝゝ詩家志の紀ゝ

夕月秋山のこずえハ狩ゐる人能
惟言の浦を交渉の吉野治て
陶冶時活名詩ゆしうて
をしまなく岩もたいふ成る人山
乃を明るを月もいしをを
西伐をしめの住よしの神
掩ふそふ月にあらぬ秋ゐ家紀能

住吉ハ西の海よりあらハれ給ひ神や
今津國へを神功皇宮の吉時
よりいひひさるゆ付る心ハ秋
西を初ふ考ひたるゝハ既よ月の
比よ成て秋や家紀ゐ住吉を
かいそき作り多木のゆきあひや
秋や家紀衣や為きうそ紀の行

あひの日より寄石をとらん

とあれハ住吉の神と云を秋や

寄きと云詞をあひしらふや

日向國あハきゝ原よりいさゝれ

いさゝふこの法師ハ六書ゆゑ出給ふ

神功皇后ハ仲哀王の后

去らぬさらハ我もとらう

月も狂ひ出る色たのむふん賢

月ハ色のめつらさやゆゑむふん

を月うら人の数ふんもとらう

人ハ人色ハ出る岩も住つ面し

地ひ阿ゝしの秋ふくの月　能

光源氏ふ明石の入江山深入く世を

いふよりうら是明石の入江の

年とハ思へ[illegible]たる成明乙甲月秋
あ[illegible]さや事記をこそるんハいのるる
たゑ[illegible]ら安ゑにも住つ屋しと云
ん[illegible]

[illegible]や跨のあつ[illegible]の群
ひと祢ゆ[illegible]から緯ふ[illegible]と月蔭て砌
跨よハ祢ゆ[illegible]と云ゆあれる月蔭

暁すれ祢ゑ
契りても人をとハめる谷の居
見れハ月すむ安ゑのふそら　作
嵐のゆ吹く人谷の居伏とそんふそ
契ても嵐よそ月のさゆ吹る時分
ふれを谷れ居よハ向来ゆ[illegible]きと
さゝろ[illegible]ふ物ゆ比

宿ゝ小光あらそふ月をうて純
十五秋の詩ふ千万里外爭吾家
光とゝもゝんゝ
塩ゝ勢寒し行すゑの秋
雲万ゝふ、よゝ世の悦日ハ苦て　賢
風さむきよゝ世の悦日ハ苦て夕塩ふゝく　多志
東路ゝ鳴くいくゝつきぬゝん

ゝひくゝふのゝ秋の約むゝ　賢
武蔵上野下総甲斐信濃ゝ
三子へ来ゝ一ゝゝ望月の約迄ハ
八月十五秋又九月十三秋ゝも有ゝ
ゝゝ
かゝふ袖ゝ　而ゝ雲そうき
去の年を秋の野山の地ゝの居　蓋

こゝろに別れとハ月を捨てさり
時世ふ住しまゝ野山のあくの
居よ住て思ふ狂うき世の秋の
面ゝ軍のうきゝゝ云んも也
ものひのゝゝ富士ハうかゝ
月さひしむろけハ嶋の秋の雲　砌
むろのハ嶋も富士も煙の立所也

秋のさひしき思ハ富士ゝゝ
限らすゝも也
夕日うつふ山のさひした
材を山寺ハ袖ふく桃恵風　敬
只ゝまゝ見捨袖のゝゝ
振人の袖吹ゝ玉秋風ふ名さひし夜雲のうけゝ
紅葉ちる木陰の月に寝うく

いたふゆりん弓ひ人の秋　純

俗人の分て立ち木ぬたのむ陰ひく紅葉　散り

僧正屋照室林院そよぐ心や

あらはにはよろて飛ものこらず

椎ひろふ秋の木ぬきかなて　賢

我宿の定まち椎の中絶て飛のむくいや　思清ん

木ぬきさひしく清ら山ぬく

紅葉ふとのあ軍のそ不毋漕みよ　砂石

紅葉ふはあけといらんらめとあ軍れ

そ不毋とハ遊女ふあ、紅毋や山ぬ

ふよあ、行幸ふたもめき紅く清

毋や彩ふる毋や

春の秋れあ軍のそ不毋不のくといく山ぬを　すきぬん

ふ、彩後ハふ清ふ

いつしの秋の哉の会に於さひて　砂石

出息石の哉言の別八九月之末頃

詠もれしを也

見ひてすめる桂しこのもと

七月は後世の山やまとなん　花屋

時過る桂を折もとゝ見ぬまてのちきの山　言ふかゝ

あつまれをたむしのうゑ

ゆくふ人もあるしれ山の桂の哉　助

とふ人もなくあるの山里に人まつ虫の声そ　庭に　多分記

さらぬ物記も袖くぬれそう

世ゝいふ地山すこの桂の哉　砂石

いくしても狂いしき世ゝ古哉の山の　秋の夕哉

多枝の紅葉ふるよりなかし

初時雨去りいの森乃秋くれて　昨

信太の杜をいたづらやる枝ある事
はふ人て居こそまさしいたづらなる
信太の森の夕枝の秋風

冬連歌

冬ゝ雪て大空ふゝ冴る雪の夜
之笠のもりふ志ゝ雪ふる比　賢
物もゝを思ふゝいを大空なる之ゝの森に
夏ゝきて又ゝつる物もゝ雪　神もゝ
さためゝる石秋るの世ゝの面の今朝の雪砂
昔大國樂王巫陽基ゝ巫山の神

女夏よきて鶏よハ雲と昨夕
よハ面とあるゝと云し生面新て付られ
ぬちくるゝけもうゝもきゝあさ
雲そゝゝふ雲のうゝしの鶏鳴　賢
隼擊雲林椎錦椎ふ云心
夢けゝ人ゝゝゝ雲ふ物の花
分明ゝ独れのさゝ京ゝ立て賢

奇の獄を独れんよ形て付ゝ立
庭火鉄ゝきて、うふ柳葉ふ
鳥の音も八雲ひの雲れ雲ゝ秋ふ助
雲よハゝひの雲と云体立
雲八雲を雲ゝ枯雲柳雲の立
さゝゆゝき神乃きゝもゝ
風やゝれ唯の鳥ふ吹ん

冬がれし芦の花ちる紙ひこの笹
見ハ芦の花ちるひこの枝枯
世の事ふハ純似ふ事也
楸うゑ原川の水
あやるき時言うむ多多純
原楸ふたゝ多をよ里
むを玉の秋の夫ゆ事ハ楸染る清き

川原ふ河ハ
つかゑぬ弱ハ呼ふをふらん
山ふふあちむらハ只実て賢
あちむらとハふ野のゑふ水道
弱にもあちむら弱と云あれハ弱ふ
あちむらを付ふ
月さひしとゑ多ふ

雲さかる袖の河原をくる程と数
雲花の雲祇や袖の河原とハ
山城の日吉社あるらん 生も袖の
河原と只いとすゝ書ゝる
袖と云ゝ筆ふれハ名所もきこ
ゆすやらきて付よきといつれも
如此ハ句を作へき物と

ゆ分ゝ社と筆ぬまくろよ
鈴さゝの井清の つゝもそひて水
とちそひゝとはけぬと付へ ん
はつゝいの井はくふり筆と
六道ふ分ゝもかゝ通ぬ
ぬきいつゝん
夕乃面の竹をうゝ

いにしへの方ふ哉ちる秋の夫ぬゝん賢
夕雲ハ氏仆を面れゝん事を学
しら秋文くハ哉れちる音のさひ
さ伐学といつの事にも秋も文
てあゝ世ふふりゝるそと云心也
雪ふるをの風のさひしさ
美爵をすゝ世ふ志事紀伶の事　敬

ゝるゝハ津の國れ名所そしを爵の
世ゝのゝるをふなせり風のゝ事き
時分伶のゝるんゝ
心のゝハ罪をもくせよ
祇方山の市猪ハ神もう事つ面　砂
心のゝハ罪をもく思つと云心を
うちゝて心あゝをいう程も地く罪

をつくさと云んよるせう　を故を
紀方の神童ハ苔海ゑ沈めら
る信をこうしてたす事んなとや
方便の殺生ハ超美必定万行と云
竹の生えふむすゆ事
山あひの袖乃京和歌史ぬ人賢
山あひの袖ゑハ竹のを松ふ或搭付ら

物ふれる
竹乃ふ手れ松る言ハ山あ井ふすし松る衣の
うゑ乃上ふ松ら或山乃ゝ事
釣もよ氏時ふ是事言ふて　歌
人ハ紀の奈を山と云んより紀ゑ松ら
あさもよひきゝつゝ松迄釣俗
飯蕨と云心やそし奈紀の國ゑ松詞ゑ紀

形に付る義也

物傷のくさ〳〵さえ物こそあれ

くさ〳〵哭ふ月、伐行と云重時く　敬

為八国文王の湯殿のくさの物物

大江望のゆやそれを物をまりくる

時宣時て月は出ふる伐行ゆふ

ふせり　え物と云に行ゆと云初注

くひ肝心や

木丁はゆふ月ゆ人々事

白砂のくひら宣ふ戸を明く　砂

几帳帷と云物あれゆ見もりひら

ふゆ云ゆ八考の迷ふのよハこのほ

ふゆた行れと為ゆ几帳と云ふ　傳れ

ハめゆ〳〵く罕ゆる和

[illegible]

弱あつむ雪の山もとくるる日ふ　砌

雪中枝駒弱弱と云心也弱ゆゑ

[illegible]と付る也

をのれ雪をうふ松ハふり

橋ふたもれる雪をうちはらひ　恠

よもきふの宿の橋の雪はらん

[illegible]

[illegible]せ洽時の詞橋の雪はらんハ

松ハうるわしくふるをのれ雪をのれ雪きえ

いる也　句のこゝハ橋の雪を掃ふ

松をあらり雪の降と付り　雪をハ

雪をと云詞ふ付られ雪古を降ふ

元おせり　是もをの雪と云詞ハ

只松をうるそハ源氏の詞よもよせ

[illegible]

はるゝく夢ふく秋ハ更よりゝ

雪ゆゑの竹の下庵姫まひて　宿

付る心ハうくれるゝ所かゝふ

明屋ゝゝ初夏の床ふきこゆや鶯乃

竹の雪はゝ下ゆれ

夢ゝふ春さ（絶ぬ呉竹の伏ゝの里ハ雪お　此の意

屋ゝて雪ふくゝゝゝとハ地ひきや

雪ふゝとゝゝ小野の山ゝ雪　作

是ハ姓言はゝ子小世山ふ法を刈ゝ

さ勢浴ふゝむゝ多ゝ集りて業平

釣屋契ゝかくのゝとくのゝ法ゝ法ゝ

うかゝゝ浴さゝ絃契れ為きゝ日ゝ

夕暮ふゝ〳〵ゝ心ゝて

忘ゝハ夢ゝゝて思地ひきや雪踏分て更絃

うゝとハ

とよろこんで是も思きやとゝ為る事
今稀なる故ふ世今の名り板を
いけうあるうあらしれるえん
給ふ筆る畫けるを業枯尾て助
人ハ昔唐ふ絵師の上手なる人を
畫ける是ハ誠よハ五まきに
いひあらはせと絵の面白ハ表ゝ
えゝと

地ふ不ゝ絵を描ゝ走ゝま
さひしさハ社ふ紀山のゝ鶴の畫　作
是ハ山里を望人ゝ
さゝと思ふ京をさひしさハゝ鶴の
初畫ふ社ふ有れる絵描ゝ走ゝま
左絶ゝ人とゝ寸れる山里ハ有れる畫よう
畫てるもさひし杉の一本

鈴のもれこのくを山の雪の琴　砌

このくを山に一枝をよる雨や

いうふれいらのくを山の一枝ひらつれふくを　を自ぬん

いそむらを志のひくさん

くるる世の三津神楽の舞の袖　砌

舞の袖よ返にんあれた昔就恋

返しうき思ひ三津神楽と昔三

人あかくふしてをしへ名儀や昔

吉野三て清三京の三皇祇今を引給時

三人天ましてあかりて舞あそひ給ら

是大和舞の初や

更りめくさうに三就三て折く

仏望ら重井ふ多記名をあ重て賢

付ふ仏立の沛名就と見へて飛を

志ゐんや　仏の名といつるすハ貞観
の時上世の仏名伝て三ヶ所に治
め給ふるれハ夫ゝ恵ふよりて法人
羅を賦と付や　陽成院の治時一万
三千仏を絵画ようて治
ゝせのくちハうゝひもゝ
梅ふるふ暦のすゑの年くふ　賢

付るハゝせと云に暦と取よりて
山中倉暦在梅花といつるんや
山家ゝたハ暦もゝゝれハ梅の冥
をもて書ゝしるんや
土めちう京の秋冬の色
下も夏のいふきけ山ち春待て　賢
西行に下野國の名所をさしも事

よあるも世所や
をぢよもいぬ紀山あり松重あとよあるや
下つ宮の志めち原はさーも茅をのろ思ふ
月雄やをくらん

戀連歌上

かりくらべて空のむ契の志ぬいふ
南い初茅の祢らんともせた　賢
初茅とハろろき女のるえ未いときな
れハ祢てらんともせたろろ行未
をたのむ志ろ志や
うろろこ祢よ茅ホろ茅茅をくのむ志ん
月雄　そ思

我が宴へる紀ノ国を
伊とそしよ濃も袖絞るむら　敬
我も物思ふ方もあしへる名れハ濃も袖
をたのそて知らぬさらハいとそしよと
思知ん名
夫ヶ阿ふりハかすまぬもう敬
月もうし忍ひよひの秋とのそ　砂

夫ヶあ宴ハうすまたも我と云ハ月を
そを袖ふへきふ月もうしといへと
うちちひふる稲之され世は雲ハ
思ひうれの乃世ちハ月もうし
夫ヶ阿ふりふ成てハ又すまも我と云や
市していをぬそをへ乃宴ら
望つぬ西と夫ヶ露を西ふ濃ん　昨

我ゆゑ君く行さともあらんをさ
してそことハをしへぬと云心
君宿ハそこともいそをしぬ（きいそこそ
めくこれあらハ君も立ぬ　　三河宿也
あらぬ世ふ人のうしハ乃うちめも賢
人のうしハと云ハうらふひと伊勢
あるうち

思ふ人のうしをふひと（生つむふ深草
ゆゑもむ明ふ人をあるのすゑ
契りより昨日の空ハ祝ひて　敬
我契ハ時の空よりもあとをきと云心
思ふよたり為言はすゑふん時の空のあるの　山風
うちとしものこあひゆゑ中
うちとすよ神明ふ釈ふの空たのめ砂

契つる人の言しのめるも恨よ々釈
神なる言ふさへられてこそとゝさるめ
人はよもかたらしものをと狂言や
言ふことゝろの志ある神も仏中をは さくら物ゝ
人〻のおもくあるらん
立しかをむくふ（きさ）うき者まて 砌
我立しかは屋久て生（よむくい）事を さへ

たゝく思ふ人はさてもんあきゝと云儀
後世迄も生（を）切ふ思心
立しかん者はやはれと後の世むくいんの 蒼さ（そうき）
かさねてゝゝあひもこそきゝ
まつ人をしのむ中帝のちゝふ釈ふ 砌
中宰の名ゝ云は立ある儀
月釈は門木立ゆ宰ふあうゝそ世志 ゆゝ匂くほゝ

雲ぬく風ふ月ハ出雲り
梅更ぬいつまて人のまくらん　同
付らんハかくれ行らん有明ふ云
志ら玉ハ苔ハまつ月ふも待ハ出る　あらいあらとハ
夕ゆふ暮ゆき袖のうらつら
恋ふ山まつ秋の夢やあらぬらん　純
恋ハ塵ふ山とかれハ袖の波ハふるき　海

と明ふ時て付り
あまりう紀世を人ふとゝ
ふ[illegible]ふ[illegible]ハ袖ふ月にをむらん賢
付る忘ハらくれ[illegible]有かし分ふ
別ふ残ハ袖ふ初め雪ん人ふ文物ふ　志ら玉ふ
おきて月つ[illegible]むすあつふ
色つき花田の帯のきぬくふ　砂

ちハあるを結ぶと志てらりされた
らゝ結といへを別の物の様ふ
きさ乗らりされを帯を結と付里
ムハきぬゝの切り姫の神や
足南くゝきハ夫よそあれ
又さぬハさらぬ別の祝よ似て　砂石
業平の母も昌よりも志りすハりふ

とゝめさて
老ぬれハさらぬ別のあるとい（ハいよゝ足南　行き夫哉
足きくゝきと別の句よあれをさらぬ　別とよ母哉
物もひの色ゝ様しふ物不きむ
返すゝふさ様重荷ふくるゝて賢
物不きむと云ゝ祭よ重荷と改様
思ふゝ様重荷とにあひもちあふこあき
ゝそ思しりされ

なをなくはひよを地中稜
國と明り世と明るよりは立もらし　敬
三地開闢より二神出現しるしめ
給ひ事ら立ちかれるも

戀連歌下

別れあれもうつろひて
はるる菊葉の梅よあふを　敬
忘れよ萩ちる生る菊のその秋風ふるをを
おくさめふしとを忘れよやそ陶えんと
忘をいて　秋風ふ事を菊ハくら
物かれをくよりされハ句のふハさやふ

おくさめにしもうつろひゆく萩の葉も

秋はあはれをうつす物やとこころ心や

如不ゐ月秋ふ袖うぬきそふ

露伐ふふ志るるおき是む菊の京 敬

是ハ光源氏うきてんのかそ攻て

臘月秋の間伯のさに逢給尚を

形見ふ取うとして芬給時

うれ分芬ふ屋て清ふ弱ても菊は京をハ

とよとて芬給ふ心也 とよとて田

ふるとハ人よいたらいを来ん

いにふともわて人ハ見まくふし 助

津の國のふるとも人をふへきよ涼こそふれ 世戸の八重ふき

おくよあるゆ如しあはるんをうれ ふるすなし

ひく音あるハはきくんもふ

風ふまも物ふうふいよう吹ハさて　昨

付ふを思ひ出ふ吹ふ風おくハやそれ

をれく秋と寄へき物とも

立俺ふれく寄にまふ浦浪ハ思ふまふ

俺よさのこと　袖おむふしそ

物ふ思ふ袖をハ見むをもふし　砂

我ふ思ふ不ふ絶いふ時ふ俺ふそもこゆまし

なれをされと袖おゆふしそふ

又立ふふ物ふうふもふ歌

焼物ふ物形ふもひの煙ふて　昨

反魂香と云焼物ふて人の魂を返ふ

ふあれいも

稀形ふ中ハ形まふふ夢

人絶ふし夢さへ花ふ覚ゆふて　蓋

人を不のふ見侍るに只美なると思し
う芝をこゝる時先人の面影の如き思出
稀なる中とい花と我なるや只悲
のこゝ花の跡〳〵を香の如なるす
を形枕のおとく思ふよりや
あらむ夕我なへてそまし
う紀中ハ見れるる月我なる信　賢

見れるとハなくふ分るんと
そををかるれ月によそへり
よひの月に出く人ぬる月新の見れて物思ふ
人も寄ふ物ふまふ　こるもを哉
ふるむれて星の数〳〵袖ぬれて　蓋
付るこゝ隠〳〵る行ふ　分ふ
あひ見ぬく星ハ数ふくるるこゝふ月ふと
地ふかゆる哉

物ふんそ宣ふうゝ
鳥あゝ宣秋の月ふひゝ祢て敬
秋宣の比独祢て我物思んけうかゝハ
只ゝの鳥ふゝしゝれゝんも宣ふうかゝ
八重葎あゝ中のゝのを
曼むしの音ふ虫く祖をんとして賢
人のゝゝねふあく音ハゝゝ迄ゝ八重

葎のゝしゝ
八重葎ゝれゝ宿ハ曼虫ハ芽ゝ祭ふ
出入人のゝゝ紀宣ゝ
うき中ゝ出のゝ宣ゝもゝゝん賢
んゝ女の他蟲をいゝむふいゝの
ゝゝゝゝ云物を付ゝ事あゝ匂の心
ハ出入人のゝゝ紀ゝゝゝれいゝゝと

云出の志ぢしもとくとる屋しと云
人や絶ふ雪の白れ云りをいもふ
取おせりいもりといふ云ちとく雪ろ
ろぬは取おきろ　法花経云吟示
をよめろ云のふ
ぬく当の年明ろ数の重ろハ家ちれ志ろ
とよめるもは人や　くハあるな

使も却ふ不とハ志らせし
玉章に筆のうきりをのき屋りて　作
人久ふ筆のをよふ不といひ屋れも
往却ふ仏の祖ハあるらかろ云
使ととしは玉れの作や
四方の海を花の水ふ者すとも戒の教ハうきし
かふくよ明ろ中屋いろし
うちと章ぬ人ハ下の第にて　砂

是ハ乃そて行合多人の車に物乃たきて
下帯ハ乃ハかゝ〳〵別とも行めぐりてもあらん
かゝるよるの心や　とそ思

蔓ハ多南乃風や匂ふらん
かゝる人の帯のゝしゝ　敦
苟の心蓮風目南本殿閣生激涼
といつらんも付るハ苦唐ハ國狂

妻をゝしれる人の皮をゝ紀て
帯につゝて妻ふゝゝせて南ハ風
ぬゝゝを我魂ハ女ふかゝふと志ゝ
別しゝ人のゝるやはゝゝ　物語
成てかゝらひゝゝゝゝ　物語あり略
ゝ寅しゝゝあれゝ風ゝ身ゝ
扇のゝむゝき國の形ゝゝ　砂

琴ハ斑女ヶ閨の扉のしゃ
笛竹乃一枝ゑひ初の恨の琴
あふひと伊ふこゝ俗中の結 賢
中結とハ琴の弟子 笛ゑそふ
物の寄ふれを如此云也
あ(イヤ書)ふさいふこゝ中乃結 賢
中乃結とハ琴の弟子 笛ふそふ物の

寄ふれハ如此也
(ヒカ寄ノ誤ス)不寄乃もゝ乃ゑ十四のすゝこも
ぬるかゝ我ハ物ふ契りを紀 賢
琴ハ陸奥ゑ十四のすゝこもと云ゑ也
見ちけくの十四乃すゝこも七四ゑハ夫我初させて
(ふふ我ねん)
更ゑゝたのめぬ達ハ奇つれて七四さひ紀十四の
すゝこも
ゑみ百番の寄の琴 此ふの寄のしゃ

月すさまじう打ち勢そ吹
見し人ハ雲ゐ遠く変ぬて　昭
見ハ光源氏すま人うちひの時切院
変ふ見ぬ恋ひふ月空すり変
うち見しる打ふしハ雲ハひとまれる
人ふ〻ま重の重衣ゐたれひき
変のうちもせたあるいろ名　源氏

の古すハそれあるうれまもなくその
うへも人をそ変ハ見をそ月
すさまじう時花のんまそ見て
人のまゑとハ対にも切不重す
移ぬる秋のうへふ人ハ変見て　砌
見ハ街人を変ふうふ其変乃
さむうさうハふうへる人のきうを

只々思ふ夢と思又戸ごとに
きゝもせぬひろぬる
涙の外の色花ハ形し
黒髪をくれやれ夢のさむる枕
夢のうちふかゝあひくゝ生人の生ゝ
此龍望ゝ絵系紅ふつゝと思ふ系
を夢ハ覚て色花ハ涙ゝ

とゝゝ心やうき涙ゝハうきあゝ保ゝ
思ひ人の移乱ゝ此面紅ふ涙うきなゝさ釈
戸明く地ゝくゝ隠津しゝ浪
涙川袖のせゝ紅をよもゝらし 紅
是ハ涙ハ袖のきハ紅をもゝらゝ隠の
ぬく地ゝゝとゝ人ゝ 布衣の隠ゝて
ぬきゝゝゝ人ゝゝあゝ白玉の万世ハ数ゝ
袖のせゝきに

芳の句は南北くちるとあれば袖のせと

きふく祠と取出せり

走るとくもきき海やあらん

見せる中に波の下のよるの床　砌

我秋の乃床いかや海の叩ふ成て色

それも夫ふふて示くと走らと

くるしき海ハ五句きあ

波の枕の下に海あれと人を為めハ生すて

ふつつと芝の床成々さふふとあらは

袖や涙と浮ふ

いつれも涙をよりあり

立の屋つこ成あるもし迷

ゆもひよといふ生田のうつ引ひ賢

波生田は物語略之万葉ヨ生田の女ハ

八栄と注せり　仍考ハ立のやうこ
のゝ形なをハ子よ立成付ちゐ
屋つゝ中ハ雪さえもうし
あふさかぬ名に流れ源川　作
あふく南川ハ陸奥雪をよゐ所四一句ハ
逢ふれ名よ流れさとも
あふく南よ雪立ちゐ里明ぬとも夫ハ

屋らしまてハすゑ和
もろ山ハ冊のよゐ乃行雪屋
ぬれぬと告よゐ袖の湊風　作
地も不見す袖よ湊のさいく我もろ玉冊の
ようし斗ふ
ふちよゐ云のゝ心ゐ
地もゐ物をゐふちよゐこゐ
ふゝゝゝ氏翼すゝ人もり　笹

人と人い我をおもふてすべし
笑ふるふるふる嘲る多はらそと云心也
東流のおこその笑はふこ多信ふるべき我身あるべん
ばもへをいふふいをなるいるへ
毎年くるいふるすきりし中そしの教
うすく恨る人を問て恨ん志らしを志らぬ
おそくよるんあるべし
ばもをしに

さく羅の年ふあるうれさ
強面残ふるをいうこと多ひ信所
つれあきを恨又八思ひ信多心を
面ふ切不くの身を絶て今あるる
年のうれきるをいり
さふ多いい乃琴ふるん
うこをるんのすを八強も所所

人をふく恨て又生恨も泡なく成て
立しきいたの契まて如此あるそと云ひや
よ野の奥ハ思のゝ筆うち
をくれといひしをかゝ紀契りて砌
前句の思ふかゝきと付りとハ勢ふ
屋ゝすゝ山ハ伊勢ゝ大和國行そ
枇杷大臣のもゝ（たゝ）ゝ（れる）
國恒の大納言子本性の
大臣時ゝ

こ輪の山いふ待ん年ふとも弱ねゝ（ゝ）ゝ（ゝ）と恋ハ
もろかしの去世の山ふ去も身をてれと思
とよゝ山ゝ行ゝ去世の山と奇ふ
あれハをくれと云義や
名もゝちゝる物ゝ言葉り
去ゝれすむ文をむ明き形ゝて 敬
ゝるき立伐よゝる奇ふ

そもそも志とは栖の草文をいう歳を惜しむ
はかの哥のんをて志をし

永禄三暦三月日

是八有子細合書与本之ゆえ
為后持之也

仙柏

拙子物のんを去りそめよりこれ久
保く之室より帰厚く一義を祈ふ
然といへども暗きこと狗の眼のごとくふ
去て出離の要路を忘れ去る後
頃寶蓮提院法京ひとの縁あて
不保より多奥に思ふを凝し作壇の
約を結ふかゝ之極寄金剛の内座を開

て圓南西得の明珠をさつけ給ひ久くふ
南眼忽にひらき南無ハ探士を出さる
法界を照らす愛よ知ぬ座を起して
三摩地現前きんとふ我是自生の
寂因よりすんといふ我是自生の
を五さん剃髮染衣の祥信を狂
角もく穴覓ひ知と形し況四異

生類羊の俗骨寧たゝふ信受
するゝ我身名是を思ふ勿それ
筆ハ薄氷をふむよりも危くまこ
ハしき筆ハ墨花ふあるよりも香ハし
世産息を結きんとするに志有て投
するふ玩賤ふ一芸ふ適和歌の道を
求ふ師もとより庭訓傳くゝてたゝふ

ふ詞ふ一くいへも報恩謝德のゝめ
終ゝ詠哥大概一部の所説是を結
すゝ所ハ是狂金をむすふ瓦を
ふゝ名ゝ紀ふる物語抑俗典の中ハ
三史五経百経の書是を顕教ゝす
和歌の一法を秘密荒ゝす所ふ秘ゝ
中の極秘之みゝ是に極すゝきあらに

但秋分八十五の中に綺語と悔き
然れども明塵劫にとゞまりし
ハゝ孔日域の陀羅尼世三摩地おいら
を花の下ハ春は日かり紅葉ふの陰ハ
秋の月耀をえん豈祝念の媒
ヨ行うすゝ

雞波津漁翁判

文化八年六月日

横山章兄在同じ物